



細野高原と三筋山

細野高原ネイチャー
ガイドクラブ

守り続けてきた大草原

稲取の町の山側、標高四〇〇メートル付近から八二一メートルの三筋山まで広がる広大なススキの原、それが細野高原です。面積は、一二五ヘクタールと、箱根仙石原にあるススキの原の七倍もあります。さらに、この草原の特徴は、海の見える草原であることです。草原の先に太平洋が広がり、そこに伊豆大島、利島、新島、式根島、神津島、そして、運が良ければ、噴煙をあげる三宅島や、御蔵島まで望むことができるのです。

昔、日本各地には、茅葺屋根に利用したり、農耕用牛馬の飼料にしたり、田畑の肥料にするためのカヤ（ススキ）を採る茅場と呼ばれる草原がありました。茅場は毎年山焼き（または野焼き）を行って、害虫の駆除、周りからの木々の侵入を防止してきたのです。時代と共に、屋根は瓦に、牛馬は機械に、肥料は化学肥料に変わり、カヤの需要はなくなり、多くの茅場が放棄されました。伊豆の各地にも、昔茅場だったところが、今は雑木林になって残っています。稲取では、数百年来、毎年山焼きを行い、草原を維持してきたのです。

細野高原の山焼きは、秋の防火帯作りから始まります。山焼きの火が周辺に広がらないように全長約一三キロメートルにもおよぶ草原の境界に沿って幅九メートルほどの草を刈り、枯れ草を取り除いておきます。そして、翌年二月に稲取の町内会などから一三〇人ほどの人が一日を費やして、管理した状況の下で

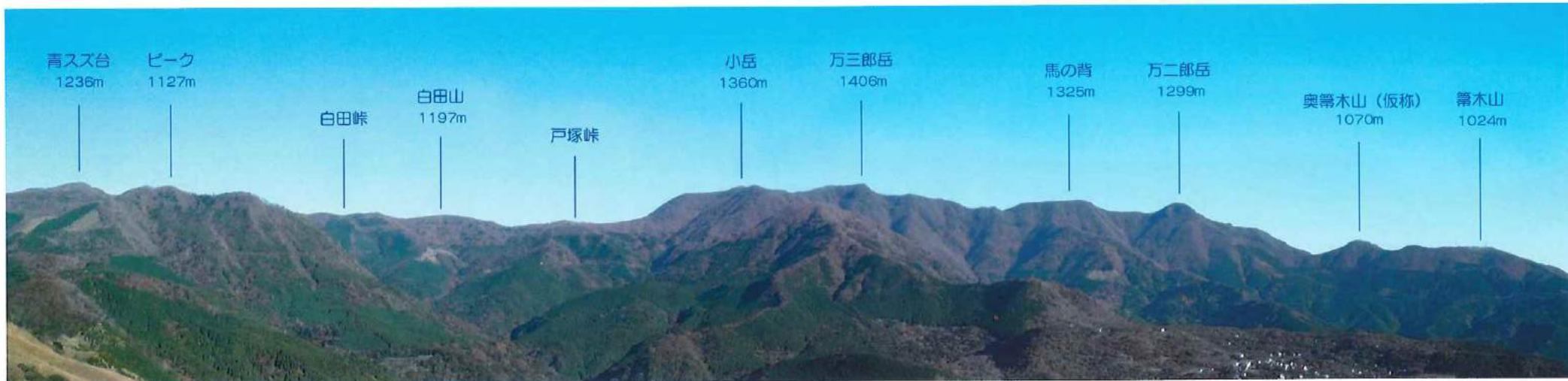


火を放っていきま。風が強かったり、雪が残っていたり、雨で湿っていたりして延期になることもしばしばあります。山焼きが終わると、人の背丈くらいもあつた枯れススキの白い原が、高さのない黒い焼野に変わってしまします。山焼きの後、四月の後半からワラビをはじめとする山菜の原になり、五月の連休には山菜狩りで賑わいます。山菜狩りが終わったころから次第にススキが生え、一面のススキの原に変わります。

夏から秋にかけて、風によって背の高いススキのうねりが原を移動していくさまは、心のなごむ光景です。そんなススキの原の中を散歩すると、スミレ類、リンドウ類、クララ、ホタルブクロ、ササユリ、コオニユリ、カワラナデシコ、オトギリソウ、ハンゴンソウ、コガンピ、ヤマドリカブト、マツムシソウ、ウメバチソウ、ノコンギク、リュウノウギク、ヤマラッキョウなど季節の花に出会うことができます。さらに草原の中には、静岡県の文化財に指定されている四つの小さな湿原が点在しており、貴重な湿原植物を観察することができます。

ススキの原の頂き、三筋山からは、目の下に広がる細野高原の先に、海に突き出た稲取の町を、そこから河津、白浜海岸、爪木崎へ続く伊豆半島東海岸を、さらに西伊豆の山々から、中高原の登山ブームで人気の高い天城山の万三郎岳、万二郎岳の峰々へと三六〇度の眺望を楽しむことができます。





春の花

夏の花

秋の花



フデリンドウ
(リンドウ科)



フモトスミレ
(スミレ科)



オカオグルマ
(キク科)



ウツボグサ
(シソ科)



カキラン
(ラン科)



チダケサシ
(ユキノシタ科)



ヤマトリカブト
(キンポウゲ科)



リュウノウギク
(キク科)



ヤマラッキョウ
(ユリ科)

